

# 幼児教育におけるコラグラフの指導法に関する一考察

桶田 洋明\*・松下 茉莉香\*\*

(2022年3月22日 受理)

## A Study on the Teaching Method of Collagraph in Early Childhood Education

OKEDA Hiroaki, MATSUSHITA Marika

### 要約

凸版・凹版・平版・孔版の4版種がある版画の中でも、コラグラフは凸版・凹版双方の表現が可能であり、制作工程が簡易ながら幅広い表現が可能な版画の一種であるため、子どもでも抵抗なく制作し満足いく作品を作り出すことが可能である。印刷方式もプレス機を使用する工程、ばれんによる手刷りの工程等、複数選択可能である。プレス機による印刷において凸版の箇所は明度差の大きい表現が、凹版の部分は明度差が小さく、微妙なグラデーションを可能とする表現ができることから、高密度の作品を仕上げる事が可能である。ばれんを用いた手刷りによる制作では、実際に手を動かして刷りの工程を体験し、刷りの加減で用紙にインクが付く量に変化する様も理解できる等、手刷りならではの気づきを得ることができる。また使用した版材がコラージュ作品として作られているため、一度の制作で2種の絵画作品を生み出すことが可能であることも確認した。幼児のスキルに見合った作業工程や制作時の留意点を明確にすることで、コラグラフ制作促進の一助となるであろう。

**キーワード** : コラグラフ、版画、指導法、幼児教育、幼児

---

\* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 教授

\*\* 鹿児島女子短期大学 児童教育学科 准教授

## I. はじめに

支持体に絵具をはじめとした様々な描画材で多様な表現ができる一般的な絵画に対し、絵画の一分野でもある版画は、比較的限定された支持体・描画材を用いて表現された作品といえる。また版画の制作過程は各段階での作業内容が決められているため、一般的な絵画表現、特に印象派以降に見られる明確な制作工程を定めない描画方法とは異なり、計画的な工程のもとに進めることができる。加えて版画は、筆に直接絵具を付けて着色したり鉛筆やペンでドローイングしたりする絵画とは異なり、版に絵具等を付けて印刷するといった間接的な彩色表現をするため、筆や鉛筆による表現に不可欠な描画スキルはあまり必要としないタイプも多い。高度な描画スキルを持たない初心者や子どもでも抵抗なく描画することができる点も、版画制作が持つ特徴の一つといえよう。

版画表現のひとつ、コラグラフは身近な材料をボードに貼り付けたものを版として表現する。特別な描画スキルは必要なく簡単な作業工程で制作できるため、幼児でも楽しみながら表現活動ができる版画である。一方で、コラグラフ表現の幅は多岐に渡って存在するため、幼児における効果的な表現のタイプや発展の可能性については未知な点がある。そこで本研究では幼児がコラグラフを用いて版画表現する際の表現・技法の種類や、それらを指導する際に有効となる指導法について考察していく。次章以降で版画及びコラグラフ技法の特徴や表現拡大の可能性について検証し、幼児が扱う際の指導的ポイントについて導き出し、適切な指導法を学生の実制作等を通して導き出していく。

## II. 版表現におけるコラグラフの位置

### 1. 版画の種類とその特徴

コラグラフについて論述する前に、版画の種類やその種類の技法的・表現的特徴について確認しておく。版画とは、版を利用してインクなどの色材を転写・透写させるという間接的方法で表現する絵画のジャンルである。版画には様々な分類方法がある。まず版の仕組み、版面がどのようになっているかの差異での分類では、凸版、凹版、平版、孔版の4つに大別できる(版形式)。また版の材料別に分類すると木版画、紙版画、銅版画、石版画、シルクスクリーン等が該当する(版種)。さらには転写・透写の方法・技法による分類では、押し出し、すり取り、すり込み等が当てはまる(印刷形式)。現代では複数の版形式・版種・印刷形式で表現された作品もあり、完成作を見てもどのように制作したかわからないものも多い。しかしまずは一種類での表現方法について、版形式を基に簡単にまとめておきたい。

まず凸版であるが、版の飛び出た部分にインクを付着させて紙に写し取る手法である。版種としては木版、紙版等が該当する。木版は版画の中でも最も知名度が高く、また紙版も小学校での授業

を中心にして実施頻度が高い材料と言える。そのほかにもリノリウム、ゴム、石膏、発砲スチロール、硬土なども含まれる。木版画の場合、版である木板を彫刻刀で削りインクを付着させる箇所は削らず最上部とする。削った箇所はインクが付かず、削らずに残った凸部にのみインクが付くため、その箇所が黒色で表現される。つまり削った箇所は白く、残した箇所が黒くなるため、紙に鉛筆・ペンなどで描画する一般的な彩色とは逆の表現となる。そのため完成時における明暗の状況がイメージしにくいという懸念があるが、印刷後に初めて作品の明暗バランスが判明することの楽しみがある。印刷形式としては、スタンプをするタイプの「押す」方法や、プレス機などを利用して形を浮き立たせる「押し出し」、ばれんなどで擦ってインクをつける「摺り取り」が挙げられる。加えて、凹凸のある材質の上に紙を置き、鉛筆やクレヨン等で擦ることにより表現する「摺り出し」もある。この技法はフロッタージュ (frottage : 仏) と呼ばれるものである。さらにはローラーや鉛筆などに紐を巻いたものにインクをつけてそれらを転がして表現する「転がし」も該当する。

次に凹版を検証する。凹版は、版の凹部にインクを入れて紙に写し取る手法となる。版種としては銅などの金属板が主となるが、PP 板といわれるポリプロピレンでできた透明な板もある。この PP 板は安価で作業もしやすいため、学校教育では頻繁に扱われている。印刷形式としては版につけたインクを版の凹部に付けて凸部のインクを除去してから紙を伏せて摺り取る、「摺り取り」が中心となる。凹版は銅板や PP 板にニードル等で削ることで版に溝をつけ、その箇所にインクが入るため、描画した箇所がそのまま黒色になる点においては、紙に鉛筆・ペンなどでの描画と同様の表現となる。銅版では防蝕剤を塗布した版にニードルで削った後、腐蝕液で腐蝕させて凹部を作るエッチングがある。また銅版に松脂をふりかけ熱で定着させた後に腐蝕することで繊細な凹凸を作るアクアチントという技法もある等、様々な銅版を用いた表現技法が存在する。

平版は、版自体の凹凸がなく、インクの付着部・非付着部が同一平面上にある形式となる。この版形式は水と油の反発作用を利用しており、描画部分を親油性にし、他の部分を水の被膜により非親油性とすることで描画部分のみにインクを付着させて印刷する。版種として、古くは石灰岩を使ったことから石版がまずは挙げられるが、現在では金属や板、ガラス等に描かれたものが主となっている (リトグラフ)。また現在の印刷物に使われているオフセットも平版に該当する。オフセット印刷は、版に付着したインクをゴム製の転写体に転写した後、紙に印刷する工程を持つ。他には、水面に浮かした絵具を紙に写し取るマーブリングや、絵具を付けた紙を二つ折りして模様を作るデカルコマニーなども平版に加えることが多い。平版の印刷形式は、石版画の「摺り取り」やマーブリング、デカルコマニー等の「写し取り」、オフセット印刷の「転がし」が当てはまる。

最後に孔版であるが、これは細かな穴が開いた版にインクをにじみ出して印刷する手法となる。版種は謄写印刷やスクリーン印刷が代表的なものとなる。謄写印刷は、蝋が引かれた原紙に鉄筆等で描いて微細な穴を開け、そこからインクをにじみ出させて刷る方法である。スクリーン印刷は、絹やナイロン等の表面からインクを摺り出させて紙に定着させる方法となっている。絹を用いていた時代では、この技法をシルクスクリーンと呼んでいた。印刷形式は穴の開いた版に絵具を摺り込

んで表現するため、「摺り込み」となる。孔版は紙以外にもガラスや金属、布などさまざまな素材に印刷が可能であり、加えて印刷面は平面だけではなく円柱や円錐などの曲面にも印刷ができるという特徴が挙げられる<sup>(1)</sup>。

以上、4つの版形式別に版画の大まかな種類や用具等について述べてみた。それらの概略を表にまとめたものが図1である。次に本研究主題であるコラグラフについて検証してみたい。コラグラフは4つの版形式においては凸版と凹版に当てはまる。次節にてコラグラフの具体的な工程や用具等について述べていくこととする。

版形式	版種(呼び名)	主な版材	印刷形式	主な色材・用具
凸版	スタンピング	自然物(葉、茎、野菜、木など)、紙	押し	インク、ローラー
	木版画	シナベニヤ、ホウ板など	摺り取り	インク、ばれん、プレス機
	紙版画	画用紙、その他の紙	〃	〃、ローラー
	リリウム版画、ゴム版画	リリウム板、ゴム板	〃	インク、ローラー、タンポ
	石膏版画、粘土版画	石膏板、硬土板	〃	〃
	スチレン版画	スチレンボード	〃	〃
	フロッタージュ	凹凸のある材質	摺り出し	鉛筆、クレヨン
	型転がし	ローラー、紙筒、紐など	転がし	インク、ローラー
凹版	ドライポイント	ポリプロピレン板、金属板	摺り取り	インク、ニードル、プレス機
	メゾチント	銅板	〃	〃、ロッカーなど
	エッチング	金属板(銅、アルミニウムなど)	〃	〃、腐蝕液
	アクアチント	銅板	〃	〃、腐蝕液、松脂など
平版	石版画(リトグラフ)	石灰岩、アルミ板など	摺り取り	リトクレヨン、プレス機
	オフセット	PS版	転がし	インク、輪転機
	マーブリング	画用紙	写し取り	油性絵具、墨汁
	デカルコマニー	画用紙、ガラス	〃	水性絵具
孔版	謄写版画	原紙	摺り込み	インク、鉄筆、謄写版
	スクリーン版画	スクリーン板	〃	インク、スキージ
	ステンシル	紙、金属板	〃	インク、ローラー

図1. 主な版画の形式・材料<sup>(2)</sup>

## 2. コラグラフの性質

コラグラフ(collagraph)の語源は、フランス語で「貼りつけること」の意味であるコラージュ(collage・名詞)から来ている。ちなみにcollerは動詞で「貼りつける、接着する」となる。コラージュは絵画の一技法名であり、支持体に紙や布などを貼り付けて表現するものに使用するが、コ

ラグラフは版画の技法名・呼び名であり、版材に様々な素材を貼り付けることで版を作り出して表現する版画の事である。なお英語表記としてはコラグラフィ（collagraphy）となる。コラグラフは1955年にアメリカの版画家、グレン・アルプス（Glen Alps：1914-1996）によって考案されたものである。合板や厚紙などを版材として、そこに接着剤や塗料などを用いて葉、紙、布、金属板などを接着したり、アクリル絵具などで盛り上げて描画したりして画面に凹凸を作り出していく。前節で触れたように、コラグラフは4つの版形式において凸版と凹版に当てはまるが、それは文献等によって微妙な差異がある。「主として凹版に適した版面である<sup>(3)</sup>」とする技法書もあるが、版面の凸部の重要な効果として用いられる<sup>(4)</sup>等、凸版としての役割を併せ持つ表記が現代の一般的な認識であると言える。なお、凸版の版形式の中に紙版画があるが、これも版材に紙を貼り付けたものを版としているため広義にはコラグラフとも呼べる。だが一般的には紙版画は独立した呼称として用いられ、コラグラフは紙を含んだ様々な複数の素材による接着や絵具による盛り上げによる版のことを指すことで分けられている。

コラグラフにおける凸版、凹版それぞれの工程や特徴についてもまとめておく。まず凸版的要素であるが、当然ながら版の凸部にインクを付着させて摺る手法である。インクを凸部にローラー等で付着させた後、印刷形式としては「押し」の方法で摺ると、凸部のインクが用紙に転写される。これは紙版画の工程と同様であり、版に付けたインクをふき取る工程やプレス機などを使って強圧を加える必要がないため、子どもや初心者でも抵抗なく制作することができる。次に凸版的要素としては、版の凹部にインクを入れる工程が必要とされる。版の凹部全体にインクを押し込むように付けた後、凸部に付いたインクをふき取ることで凹部のみにインクが定着する。印刷時では凹部にあるインクを転写するために強圧が必要となる。よって印刷形式として「押し」では圧が足りないため「摺り取り」の工程になる。その際、ばれんなどで摺り取りを行うこともできるが、より強い圧を求めるためにはプレス機の試用となるであろう。そのためには用具の準備や一定の作業環境、さらには制作者の印刷技術もある程度は必要となる。プレス機の使用に関して、制作者が子どもの場合、小学校中学年児以上であれば可能と思われるが、それ以下の子どもには安全面も考慮すると困難である。大人である指導者、教員、保育者が印刷工程の補助を要することになる。加えて、インクをつける工程においても、凹部にインクを入れるために凸部に付いたインクをふき取ることは幼児や1, 2年の小学生には困難であろう。凸版中心のコラグラフとすればその問題点を検討する必要はなくなる。しかしながら凹版の、強圧による凹部に付着したインクが醸し出す定着性やインク密度の高さは、凸版のインクとは異なる魅力がある。子どもが行うコラグラフ表現でも可能な範囲で凸版と凹版それぞれの表現を味わえるのが理想であろう。

次章では、大学生によるプレス機を用いたコラグラフの制作過程について検証し、特に幼児が実践可能なコラグラフの工程などに関する手がかりとしていきたい。

### Ⅲ. プレス機を用いたコラグラフ制作

#### 1. 制作工程

本章では一般的なコラグラフ制作実践を基に検証し、その特質について確認したうえで幼児が実践する際の端緒としていく。

制作内容や手順は図2に示す通りである。具象的表現と抽象的表現の2点を制作する。版材としては厚紙（イラストボード：B5サイズ）で、貼り付ける素材は自由とした。プレス機による印刷をすることから、貼り付ける素材の厚みの差がありすぎると印刷時に用紙の破損が懸念されるため、特に硬質な材料をコラージュする際は厚みに留意して制作するよう指示をした。参考作品としては過去の学生作品に加えて、筆者が大学時代に制作したコラグラフ作品も提示した。これらはB4サイズであるため今回の制作サイズの2倍である分、密度が高いものとなっているが、様々な素材によるコラージュに加えてアクリルジェッソによる描画的マチエールも用いているので、特にアクリル絵具をマチエール作りに用いた参考作品としては高い効果があると思い、サンプルとした（図3、図4）。

実際の工程を簡単に触れておきたい。まずは具象的表現、抽象的表現それぞれの構想をスケッチする。その際、扱う素材との相関があるため、概略図程度にとどめておく。その後、貼り付ける素材を収集する。葉や茎などの場合は、そのサイズや太さ厚さに注意しながら意中のものを選択していく。特に具象的表現では、どのような素材で作

り上げていくか考慮する必要がある。素材そのものの魅力、例えば地肌の細かさやランダムな形、

対 象:	大学2～4年生
テーマ:	具象的表現、抽象的表現の計2点
サイズ:	それぞれ B5(182mm×257mm)
版 材:	イラストボード
材 料:	自由(厚さは3mm程度まで)
インク:	油性・青色のみ
印刷方法:	プレス機使用
工 程:	
	①構想画をスケッチ
	②材料を収集
	③材料の貼り付け、描画
	④乾燥後、ニス塗布
	⑤インクをタンポで塗布、拭き取り
	⑥プレス機で印刷

図2. 授業の概要・工程

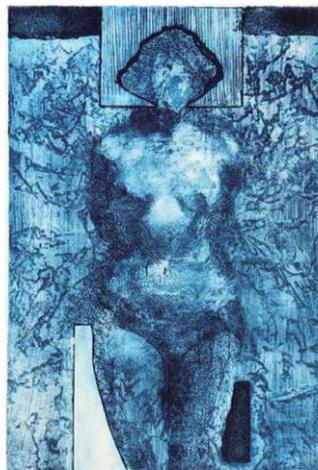


図3. 具象的参考作品  
筆者大学時制作

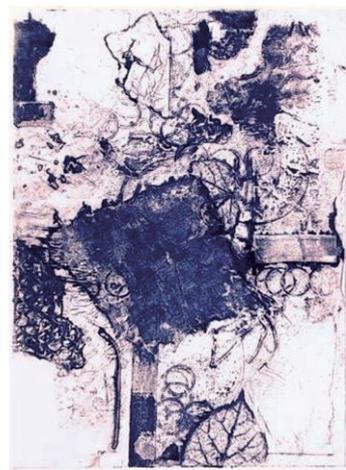


図4. 抽象的参考作品  
筆者大学時制作



図5. 素材の選定と構図決め



図6. 素材の接着



図7. ニス塗り



図8. インクの摺り込み



図9. 濡らした版画用紙



図10. プレス機による印刷

有機的・無機的な模様などを注視し、自身が好む素材を選択してから表現を考えてもいい。

コラージュする材料がそろったところで、あらためて構図等を考えていく（図5）。同時に素材の大きさは形体を選択しながら扱う素材を決めていく。また、コラージュするための接着剤も用意する。アクリル絵具を使用する場合、アクリル絵具の添加剤としてのジェルメディウムなども強い接着力があるため、素材を接着させることができる。

構図や使用する素材が決まったところで、素材を接着していく（図6）。素材に合った接着剤を用いて画面に置いていく。接着剤そのものも画面の凹凸に関与するため、計画的に用いる必要がある。版材のイラストボードからはみ出た素材は、乾燥後にボードのサイズにカットする。画面からはみ出る素材を用いることで、構図的にも外への広がりが増し、画面全体の大きさや動勢が助長されることになる。また素材のマチエールによって印刷時の明暗を想像しながら進める必要がある。素材の固有色は関係ないので惑わされないように留意し、マチエールの粗密の差や素材の形体のバランスを見ながら各自が意図する形体を追求していく。なお、具象的表現のほうは具象物を何にするか、どのように具象表現をするかを考えながら制作する必要がある。陰影まで表現する具象表現の場合、影の部分に粗いマチエールを施すことでインクをその凹部に入れ込むことができるということを想定しながら作業を進めていく。

1日以上おいて画面が乾燥したら、水性ニス表面に塗布する（図7）。この工程は、インクを付けた際に画面にインクが吸い込むことを防止するために行う。特に版材のイラストボードがむき出しの箇所は紙そのもののためインクの吸収力が高い。よってその部分は念入りに塗る必要がある。半面、アルミホイルやビニール等の素材が貼られた箇所はインクを吸収しないため、ニスを塗布す

る必要はない。水性ニス は 15 分程度で乾燥する。

水性ニス が乾燥したら、インクを画面に付けていく (図 8)。インクをつけたタンポなどを画面に押し込むように置いていく。特に高低差のある箇所や細かい凹凸がある部分には多めにインクを付けて押し込むように置いていく。イラストボード地の箇所など白色のままにしたい部分にはインクをつける必要はない。ここで凸部、凹部のどちらにインクをつけるかを確定させる必要がある。完成の明暗バランスを想定しながら、また暗部の明度差もイメージしながら決めていく。また貼り付けた素材によって凸版、凹版のいずれかに適しているかがほぼ決定しているものもある。例えば紙やすりは凸部にのみインクをつけるよりも、凹部に付けたほうがきれいな暗色が表出される。凹版的表現をする箇所は、インクを一度つけてから拭き取りの工程をする必要がある。凸部に付いたインクのみを布や寒冷紗などで取り除いていく。その際、凹部の形体や方向を考慮し、凹部のインクまで取り除かないよう注意しながら拭き取りを行っていく。

版にインクをつけたら印刷するために版画用紙を取る。印刷に使う版画用紙は紙の厚さ、表面のテクスチャー、色などに違いがあるので、適したものを選択する。今回はインクの色を藍色に近い青色としたので、用紙の色はやや黄色寄りのものでした。また油性インクを用いた版をプレス機で印刷する場合、一般的には湿らせた用紙を使用する。用紙を湿らすと紙の繊維が伸びるため、版の凹部に紙が入りインクを良く吸い取ることができ、きれいな色面を生み出すことができる。湿らす水の量や湿らす時間などは紙の厚さや表現方法等で変化する。厚い用紙の場合は印刷する前日の夜から湿らせることがあり、一方で薄い用紙では印刷する直前に霧吹きで水をかける程度にしてもよい。今回は印刷の 15 分前に水を入れたトレーに浸し、その後、新聞紙の上に置いて余分な水分を除去した (図 9)。

プレス機のベッドプレートに、見当として版画用紙と同サイズの紙をマスキングテープなどで貼り、その紙の上に版を置く。さらにその上から版画用紙を見当の紙に合わせて重ねて置いてフェルトをかける。なお版画用紙の表面は、粗目のマチエールを持つ側であることが多い。プレス機のハンドルは途中で停止させずゆっくり、版が通り過ぎるまで確実に回す (図 10)。

## 2. 作品の分析

以上の工程で制作したコラグラフ完成作品の一部を挙げて分析してみたい。まず具象的作品のほうであるが、図 11 と図 12 のように素材そのものを具象形体の形に切り取り貼り付けたり、植物などをそのまま貼り付けたりすることで具象形体を表現する方法がある。これらは具象的形体を主に輪郭線で表現することができ、比較的簡単に具象的形体を画面に表出させることができる。一方で図 13 のようにアクリル絵具等の塗布によって画面に凹凸のマチエールを作り、具象的形体の明暗をインクで表現することで立体感を生み出す技法もある。この技法は凹凸の大小やインク量の加減等によって微妙なグラデーションを表現することができるが、高度な描画技術と絵画的再現描写力を必要とする。美術系の学生であればある程度の表現は可能であるが、一般の学生はもとより、子ど



図 11. 具象的作品1



図 12. 具象的作品2



図 13. 具象的作品3



図 14. 抽象的作品1



図 15. 抽象的作品2

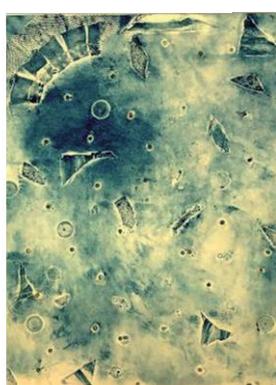


図 16. 抽象的作品3



図 17. 抽象的作品4

もには難易度が高いので不向きである。ゆえに、子供が具象的作品を作る際は、おのずと前者の具象形体の形に切った素材を取り貼り付けたり、植物などをそのまま貼り付けたりする手法を選択することになるであろう。次に抽象的作品は図 14 から図 17 であるが、いずれもコラージュされた素材そのものの形体や質感の差が画面に表れていて魅力あるものになっている。図 14 や図 17 に見られるように、細かい凹凸がある素材はインクが多めに素材の凹部に付くため、印刷後は濃い表現になっている。また四角形や三角形などの幾何形体を用いることで直線的形体が画面に散見することができ、明暗のアクセントやコントラストを作り出している。

具象・抽象作品全体に言えることとしては、まずは凸版と凹版の特徴の両方が表現されていることが挙げられる。多くの作品は凸版的要素が大きいだが、例えば図 11 の尾ヒレの部分、図 13 の暗部、図 14 と図 17 のサンドペーパーをコラージュした箇所などは凹部に入ったインクが用紙に強く付着しており、凸版による暗部とは異なる、落ち着いた色調の暗色が表現されている。次に明暗のグラデーションが細かく表現されていることも全体の作品から読み取ることができる。図 11 から図 13 の具象的形体の背景や抽象的作品の図 15 と図 16 に見られる幾何形体以外の部分は、明から暗への微妙なグラデーションが成されており、3 次元的な奥行きを生みだしている。この明暗のグラデーションは、版の平滑な部分につけたインクを作者の意図する頻度で拭き取ることで表現される。こ

の表現をするためには一見すると高度な描画技術が必要と思われるが、適当な拭き取りを行うだけで可能となっている。また今回の工程ではプレス機による印刷のため、このような拭き取りによって版の凹部にわずかに付着したインク写し取ることができるのである。

### 3. 版の魅力

今回の制作では、イラストボードを版材としてそこに様々な作品を貼り付けて凹凸を作り出したものにインクを塗布・拭き取りの後プレス機で印刷した訳だが、印刷後の版そのものも絵画作品としての魅力を持ち合わせている。それらは様々な素材をコラージュして作った後にインク（今回は青色のインク）で画面全体を薄く塗布した状態となっており、それら素材による形体やマチエールの魅力、及びインクによるヴァールの合致から、ひとつの作品として成り立っている。実際の版を2点挙げてみる。図18は図11の具象的作品の版である。たまたまコラージュとして選択した素材そのものに赤、黄、緑等の色が付いていたため、通常の版以上に作品的要素が強いものとなっている。また背景は白色のイラストボード地で、その上に赤や緑という補色の色彩が置かれているため、本来であればやや色面の構成上バランスを欠くと思われるが、その上にインクの青色がレイヤー状にかかっているため彩度や配色の統一感が生まれており、違和感なく見ることができる。もう1点、図19は図15の抽象的作品2の版である。こちらの版はイラストボード地およびコラージュした幾何形体の画用紙の白色以外に、黄土系の色の紐と紙やすりのみで構成されているため、当初から配色としての問題点はあまり見受けられない。しかし左下の黄土系、右上に白色が集中しているため、色面が対角線で2分割されており、構成面ではあまり良いとは言えない。そこにインクの青色が入ることで画面全体の明度差が低くなり、また右上の画用紙による幾何形体にインクが入り込むことで青色の正方形が明確になっており、それらは対角線での色面分割を弱める役割を果たしているといえる。



図18. 図11 具象的作品1の版



図19. 図15 抽象的作品2の版

以上、本章ではプレス機でのコラグラフ制作における作業手順とその作品に関して検証してきた。プレス機による印刷によって凸版、凹版双方の版形式を利用することができ、また微細なインクも転写することができることで繊細な明暗の階調表現が可能となることを確認できた。また使用後の版はコラージュ作品としての魅力を兼ね備えており、絵画作品として十分に鑑賞ができることも判明した。次章ではプレス機が無い環境下におけるコラグラフ制作について述べていく。

## IV. ばれんを用いた手刷りによるコラグラフ制作

### 1. 制作工程

本節では、幼稚園教諭や保育士を目指す学生に対して行った、手刷りによるコラグラフ制作の授業実践を基に、保育現場で幼児と活動する際に保育者が留意すべきことについて考察していく。

まず本実践では、コラグラフならではの材料が持つ模様の面白さに気づき、材料から発想した具象的なモチーフを表現することをテーマとした。また、背景の無い単独版で表現する学生については、塊感を感じられるモチーフとすることなどを条件として加えた。

材料については、保育現場で幼児と実践できるような身近な材料であること、適度な厚みはあってもボンドで確実に接着でき丈夫に製版できる素材であること、表面に多様な模様があり造形的な効果が期待できるもの、さらに表現したいテーマや発想の広がりにも関わるため、できるだけ様々な素材を揃えることなどを考慮し準備した（図 20）。

次に、制作手順に関しては図 20 の工程に挙げた通りであるが、おおまかな流れとしては、まず材料を手に取りながら表現するものを構想し、テーマが決まったら版材となるボール紙に直接下絵を描き、その上に様々な形に切り取った材料をコラージュしていった。

この過程における学生の様子については、隣り合うパーツの形の響きや、模様の美しい組み合わせなどを試行錯誤する様子が見られ、さらに形を強調させるためにモールやリボン、麻紐を使って輪郭線を作ったり、チューブ状のボンドを版材に直接絞って固めるなどして線描に近い表現をしたりと（図 22）、材料と関わることで構想時にはなかったアイデアを取り入れながら、各々が材料

対 象：短期大学 1～2 年生
時 間：90 分×2 コマ
テーマ：材料の模様から具象的なモチーフを発想し、作品を 1 点制作する。
サイズ：B4 版（257 mm×364 mm）
版 材：マニラボール紙
材 料：片段ボール、モール、瓢箪モール、麻布、麻紐、型押し紙 3 種類、寒冷紗、レースペーパー、緩衝材、毛糸、果物用梱包材、ネット、丸シール、デニムリボン、アルミホイル、画用紙、ボンド他
インク：水溶性版画用インク（黒）
印刷方法：ばれんを用いた手刷り
工 程：①コラージュ用の材料からアイデアを広げる。 ②土台のマニラボール紙に下絵を描く。 ③材料を切り貼りする。 ④乾燥させ、表面にニス塗る。 ⑤タンポで版にインクをのせる。 ⑥紙を水で湿らせ、ばれんで刷る。

図 20. 授業の概要・工程



図 21. コラージュ用の材料と刷りの道具

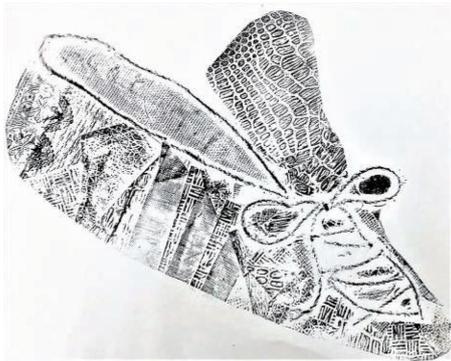


図 22. 麻紐（左）とボンドによる表現（右）

を活かした表現を試みていた（図 23～27）。

次に、刷りの工程についてであるが、本実践では綿布を丸めたタンポやばれんを用いるなどして、現場でも行われているような方法と手軽に準備できる材料で刷ることとした。

手順としては、コラージュ版の接着剤が乾燥したら表面をニスで固め、版を新聞紙にのせ、版の形と版紙の大まかなあたりをつけた簡易的な見当紙を作った。続いて、版画用紙の表面に霧吹きで水分を撒き、新聞紙で水分を軽く拭き取り刷っていった。学生によっては紙に含ませる水分が少なく、紙と版が密着せずにインクが薄くなり形が明確にならないものや、逆に紙の水分が多くインクが滲むものもあり、指導者や保育者は適度な水分を含んでいるか丁寧に指導する必要がある。

一般的に版画の工程の中では刷りの過程が最も難しいとされているが、実際に幼児と活動する際は、色形が写る楽しさと製版の結果を十分に味わえるよう、刷る際に版の造形が崩れないよう丈夫に製版することや、適度な水分を含んだ版紙が準備できているかといった確認が必要である。また、タンポで版にインクをのせる際は、インクの量を均一に伸ばさなければ模様や形がつぶれ曖昧な造形になるため、一度に大量にのせず少量を数回に分けて塗付するような声掛けも重要である。

## 2. 制作時の留意点

幼児と制作を行う際に留意すべきこととして、道具と材料、幼児期の造形表現の発達 の 3 点を加えて整理していく。

まず道具についてだが、ハサミを扱える年齢の幼児に対して活動を行う際は、年長児であればコラージュする材料を好きな形に切って思い思いの版を作ることができるため、ハサミで切ることができる片段ボールや寒冷紗、麻布などのコラグラフに適した多様な材料を準備し、素材によって異なる模様の面白さにふれ、自分で切った形から作りたいもののイメージが膨らむようにすることが大切である。

一方、低年齢の幼児やハサミを使う経験が少ない幼児へは、画用紙や、表面に凹凸模様を施した型押し漆紙、葉っぱ、レースペーパーなど、幼児が手でちぎって簡単に形を作ることができる厚みの薄い材料を揃えることで活動に取り組みやすくなる。また、手ではちぎれない素材でも、保育者

があらかじめ色んな形や大きさに切ったパーツを複数準備しておくことで、幼児は自分でちぎった形や、様々なパーツを組み合わせることで自由に見立てをして作りたいものを考えたり、模様のように並べたりして創造的な版が作れるよう配慮することも重要である。

次に、コラージュする際に使う接着剤については、主に年長児などはボンドを扱う園もあるため、糊で貼れない素材や、やや厚みのある素材を加えたりすることもでき、コラージュする素材が広がる分、表現を深める事にも繋がるだろう。ただし、前者については一か所に材料を重ねすぎてしまうと立体的になり、刷りの工程が難しくなるため、保育者は刷りに適した程よい厚みになっているか幼児の制作中の様子を見守り、必要に応じて援助することも大切である。これに対して年少から年中児は、接着剤としてフェキ糊などを使う園が多いため、糊でしっかり貼れて刷りの過程で剥がれない材料を準備する事、製版の仕上げとなるニス塗りなどを丁寧に行う事なども念頭に入れておく必要がある。

3点目の留意事項としては、コラグラフをはじめとした版表現は、製版したものの結果が刷りの過程で思いがけない色や形、模様として表れてくることに楽しさがある。幼児と活動する際もこのような版の魅力をもっと味わえるように、製版の段階でイメージした形になるよう、どんな形を組み合わせれば良いのか、パーツの形、大きさ、貼る位置などの構成を考え、つくりたいもののイメー

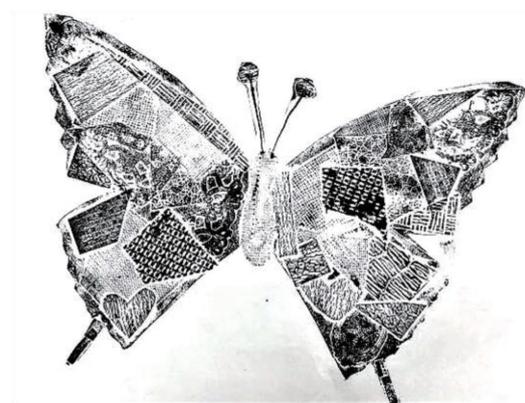


図 23. 学生作品 1

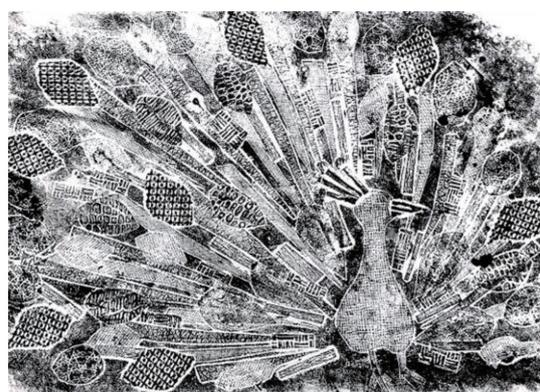


図 24. 学生作品 2



図 25. 学生作品 3

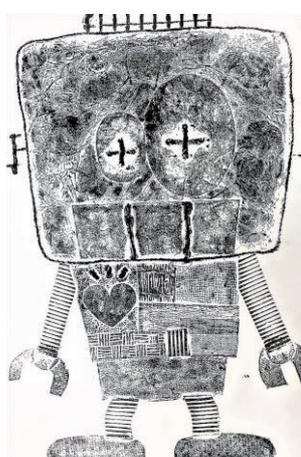


図 26. 学生作品 4



図 27. 学生作品 5

ジに合うような模様の素材を選ぶなど、おおまかな見通しをもって取り組むことも幼児の造形的な思考を育てる上では大切なことである。

しかし、幼児期はどちらかと言えば材料に触れて自由に関わる中で作りたいもののイメージが広がっていく時期でもあり、表現への取り組み方として作りながら思考したり、見通しを立てずに作り始めたりする特徴<sup>(5)</sup>もあるため、そのような発達の特徴も踏まえた上で、幼児が主体的に関わってみたくなるような多様な材料を準備し、制作過程で様々な試行錯誤をすることで幼児の表現が広がるよう配慮する事と、前述したような結果を予測して製作することだけに拘らず、使ってみたい素材を好きなように組み合わせることで、写し取った時に立ち現れる造形の意外性も十分味わえるようにすることも必要である。

## V. おわりに

コラグラフは簡単な制作工程ながら幅広い表現が可能な版画の一種であり、幼児期の子どもでも抵抗なく制作し、満足のいく作品を作り出すことができるものであることが確認できた。様々な素材を探索し、それらを画面に張り付けたり、インクをつけて刷るという工程の体験をしたりすることは、通常の描画材を用いて用紙の上に描画する絵画表現では得られない充実感を味わえる。またプレス機による印刷では凸版・凹版双方の表現が可能であり、加えて微妙な明度差も表現できることから密度の高い作品を仕上げることができる。ばれんを用いた手刷りによる制作では、実際に手を動かして刷りの工程を体験し、刷りの加減で用紙にインクが付く量に変化する様も理解できる等、手刷りならではの気づきを得ることができる。さらに、使用した版材そのものがコラージュ作品として成り立っているため、一度の制作で2種の絵画作品を生み出すことが可能である。版画というと専門的技術を必要とするイメージが強いため、幼児の造形教育には敬遠しがちな面があるかもしれないが、コラグラフ制作は簡易な作業工程と飽きることのない手順を持ち合わせているため、積極的に取り入れることができるであろう。今後も版画分野の分析を継続して行い、幼児期の子どもに適した作業工程や内容を持つ技法について探究していきたい。

### 註

(1) 羽場徳蔵、『やさしい版画教室』、株式会社国土社、1963年 参照

(2) 同上、p.15 参照

(3) 吉田穂高ほか、『版画の技法』、美術出版社、1964年 p.177

(4) 同上、p.177

(5) 内閣府・文部科学省・厚生労働省、『幼保連携型認定こども園 教育・保育要領解説』、フレール館、2015年、pp.10-27 参照